

---

# 青い冠

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

青い冠

### 【コード】

N5957C

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

昔のデンマーク。貧しい若者フリッツは愛する娘マリーネに誕生日のプレゼントをどうしてももあげたいが。ヤギルマギクのお話です。

## 第一章

### 青い冠

今よりずっと昔のデンマーク。この国は寒い国だ。

冬は長くとても厳しい。何もかもを雪と氷で覆ってしまう冬があまりにも長いのだ。

しかしそんな国にも春はやって来る。春はどんな寒い国にも存在しているのだ。

デンマークの長い冬が終わり春の日差しが世界を照らす。雪も氷もとけ花々が姿を現わしてきた。

「やつと春だな」

「ああ」

人々は笑顔で言い合う。雪がなくなつた草原に出てチーズとワインを楽しむ者もいれば踊りを踊っている者もいる。羊や牛がのどかに草を食べ子供達はその周りではしゃいでいる。そんな楽しい春のはじまりであった。

春は嬉しい季節だ。皆が祝っている。フリッツもその中の一人だった。

野暮つたくて冴えない外見の若者だった。背は大きいがそれだけだ。茶色がかつた金髪はやたらと癖が強く青灰色の目はいつもうなだれた感じである。うつむき加減で歩き暗い顔をしている。あまりいい外見の若者ではなかつた。

彼は草原に座つて一人ビールをちびちびとやっていた。木靴に質素な服。あまりいいとは言えない格好であった。

そんな彼のところに若者達がやって来た。そして朗らかに声をかけてきた。皆彼と同じく木靴に質素な服である。しかしその顔は彼のものとは全く違い実に明るいものであった。

「そこにいたのか、フリッツ」

「うん」

フリッツは静かな声で彼の周りに座った友人達に声をかける。

「向こうに行こうぜ。女の子達は踊ってるよ」

「いや、今はいいよ」

しかし彼はこう言っただけでその場を動こうとはしない。

「今はこうしてビールを飲んで過ごしたいんだ」

「ビールなら向こうにもあるぜ」

「なあ」

友人達はそう言い合う。

「ビールだけじゃなくてワインもある」

「チーズもソーセージもあるぜ。御前ソーセージ好きじゃないか」

友人のうちの一人がこう言ってきた。

「だからさ。来いよ」

「そうだよ。折角の春なんだからな」

「うっん」

しかしそれでも彼はいい顔をしなかった。暗い顔にさらに気難しさまで加えてきた。

「後で行っていいかな」

「そう言っただけでまた来ないんだろう？」

「駄目だぜ、そんなのは」

友人達は彼の引つ込み思案は知っていた。だからこう言っただけでも引つ張ろうとする。

「それにさ。向こうには」

一人が笑みを作っただけで言ってきた。

「マリーネがいるぜ」

「マリーネが」

「そうさ」

フリッツが顔を上げたのを見て心でも顔でも笑みをさらに強くさせた。

「どうだい？御前彼女のことを好きなんだろ？」

「いや、別に」

しかしフリッツはそれを否定した。それでも顔を上げたのは事実だからもう手遅れであった。友人達はここぞとばかりに搦め手で来た。

「いいから来いよ」

「皆で楽しくやればいいじゃないか」

「ううん」

フリッツはまだ難しい顔をしていたがそれでももう陥落寸前であった。実際に彼は陥落した。

「じゃあ」

「あっちだぜ」

「ついて来いよ」

「うん」

ビールを持って友人達について行く。彼等が案内したのは草原の上の方の丘であった。彼はそこに連れて来られたのであった。

「おう、フリッツ連れて来たよ」

そこには村の若者達と娘達が集まっていた。そしてそれぞれ酒や食べ物を楽しみ踊りを踊っていた。そうして春がやって来たことを祝っているのである。

皆笑顔である。その笑顔の中にはフリッツが意識しているあの娘のものもあった。彼はそれをすぐに見つけて心の中で微笑むのであった。

「こんにちは、フリッツ」

その彼女が微笑んできた。マリーネだ。

赤い髪に栗色の瞳をした可愛い女の子だ。白く透き通るような肌にまだ幼さの残る顔立ち、彫はそれ程ではないがそれでも整っていた。

背はかなり小さかった。フリッツが大柄なのと比べるとかなり差があった。青と白の服がよく似合っていた。

「うん、マリーネ」

フリッツは彼女に朴訥な声で挨拶をした。

「そこにいたんだ」  
「ええ」

マリーネはにこりと笑った。しかしフリッツははにかんで笑うだけであった。

「そうよ」

「フリッツもこっちにいらっしやいよ」

女の子のうちのそばかすの娘が声をかけてきた。

「あんた達もね」

「ああ、わかったよ」

「実はフリッツを連れて来たんだ」

彼等は口々にこう述べる。

「こいつがさ、ずっと一人でいたから」

「それでね」

「何で一人でいたの？」

「いや、何となくだけれど」

マリーネの問いにそう答える。フリッツは少し俯いていた。

「特に何も思い浮かばなくて」

「そうなの」

「全くよお」

若者のうちの一人がしょうがないなといった顔で彼に対して言うてきた。

「相変わらずだな、そういうところは」

「もうちよつと歌とか踊りとかやってみたらどうだ？」

別の若者も言った。さつき彼をここまで連れて来たうちの一人で

あった。羽帽子をお洒落に被っている。

「何かいつも野暮ったいんだよな」

「そうそう。大人しいし」

「俺歌も踊りもあまり上手くないから」

フリッツはそれに応じて言った。

「だから。そういうのは」

「まあ仕方ないな」

「それもそうか。御前は御前で得意なところがあるしな」  
「ああ」

仲間達に答える。実は彼は大きな身体に似合わず手先が器用だ。それで色々と農具を修理したり何かを作ったりしているのだ。それで村では結構重宝されているのである。

「それでね。フリッツ」

あのそばかすの女の子が彼に声をかけてきた。

## 第二章

「何だい、今度は」

「覚えてるかしら」

「!？」

彼女の言葉に目をしばたかせる。

「何を？」

「何をつて春なのよ」

そばかすの女の子はくすりと笑って言った。

「春って言えば」

「マリーネの誕生日じゃないか、もうすぐ」

羽帽子の若者がここで付け加える。

「思い出したか？」

「あつ、そうだったね」

言われてようやく思い出した。迂闊なことに。

「御免、忘れてた」

「いえ、いいわ」

マリーネはくすりと笑ってそれに応える。そして仲間達がかわり

のように言う。

「それでな」

「誕生日に」

「うん」

フリッツは彼等の話を聞いていた。彼等は話しはじめた。

「皆で贈り物をしようと思ってるんだがな」

「贈り物!？」

「そう、皆でな」

羽帽子の若者だけでなく彼と一緒にいた鼻の高い若者も言う。

「どうだ、悪い考えじゃないだろ？」

「マリーネの為にな」

「マリーネの為に」

フリッツはその言葉を聞いて自分も呟いた。彼等はそんな彼に対してさらに語り掛けるのであった。

「銘々でプレゼントをあげる」

「誰のが一番いいのか競争も兼ねてな」

「勝負なのよ」

そばかすの少女も言ってきた。

「マリーネが一番喜んでくれるのはどの贈り物なのかね」

「けれどさ」

青い目の少女がここでにこりと笑って述べる。

「マリーネは優しいから皆いいって言うかもよ」

「それならそれでいいわ」

そばかすの少女はそれでも動じはしない。

「だってマリーネが喜んでもらう為のものだから。そうでしょ？」

「そうね。それならそれでいいわね」

「そういうことよ」

「フリッツ、聞いたな」

羽帽子の若者は面白そうに笑ってフリッツにまた言う。

「御前も何か贈り物しろよ」

「俺達に負けないようにな。いいな」

鼻の高い若者が最後に声をかける。フリッツはそれをただ聞いているだけであった。今は話を聞いて呆気にとられるだけであった。

だが話が終わって彼はあらためて思った。何かしなくてはと。

しかし彼の家は貧しい。贈り物をしようにも何も無いのだ。彼は家に帰ってその何も無い我が家を見てふう、と溜息をついたのであった。

「本当に何も無いや」

皿もその他の家具も木製の使い古された今にも壊れそうなものであった。こんなものはとても贈れそうにない。

夕食の時に両親に相談してみる。父も母も働きづめで疲れた顔を

している。

「お母さん、いいかな」

「どうしたんだい？」

母は黒パンをビールに浸して食べながら彼に声をかけてきた。この時代はこうしてパンを食べるのが普通だったのだ。ビールは飲むパンと言われていたのはこの頃からである。

「うん、うちにき。何か立派なものってあるかな」  
暗にそう尋ねてきた。

「立派なもの！？残念だけれど」

母はその言葉に空しく首を振ってきた。

「ないね。わかってるだろ？」

「うん」

この言葉に頷くしかなかった。わかってはいた。

「何も無いよ」

「食べるだけで精一杯だから」

父も言ってきた。彼はスープを飲んでいる。殆ど具の入っていないスープを。その僅かな具は古いしなびた野菜であった。本当に粗末なものであった。

「何も無いな」

「そうだよ」

フリッツはそれを聞いて悲しい顔で俯いた。

「わかったよ。じゃあいいよ」

彼は言った。

「御免ね、変なこと聞いて」

「それはいいけれど」

母は言う。

「何か今日はおかしいね」

「そうかな」

その言葉にはとぼけてみせた。あまり上手くはない演技ではあったが。

「そうだよ。まあいいさ」

母はそれ以上は聞こうとしなかった。フリッツにとっては幸いなことに。

「早く食べなさい。そして寝るよ」

「うん」

彼は頷いて食べるのを急がせた。それが終わると本当に寝るしかない。この時代は灯りになるものはどれも非常に高価であり貧しいフリッツの家にとっては高嶺の花だったのである。彼としてはどうすることもできないことであつた。だがもう一つのこととはどうにかしないといけないと思つていた。贈りものことである。

皆同じベッドに寝ている。両親と同じベッドだ。フリッツはその中で考えていた。贈り物は何がいいか。あれこれ考えていたのである。

「何がいいかな」

考えても結論は出ない。出そうとしても出ない。結局何にするのか決められないまま時間はす義テイク。気付いたら朝になつていた。何にするのか決められなかつた。

朝になつて小さなチーズとやはり黒く堅いパンを食べて朝食を済ませた。それが終わってから畑仕事に取り掛かつても贈り物のことを考えていた。しかしそれでも何にするかは決められないのであつた。

そのまま働き続けていると父親が声をかけてきた。

「休憩にするか」

「そうだね」

母親がそれに頷く。フリッツも頷く。そして今度はパンは同じだがソーセイジや魚もある幾分ポリウムのある昼食を採つた。酸っぱいものだがワインもあつた。それでエネルギーを補給するのである。

一家で食事を採る。野原に座り楽しい食事となつた。しかしまだフリッツの顔は晴れないのであつた。それは変わりはない。

しかし。野原にふと目をやっている。彼の目に青い花が入って来た。ヤグルマギクの花であった。

「青い花か」

それを見て呟く。何気なく咲く花だった。しかしそれを見ていると。彼の心にあることが思い浮かんできたのであった。

「青い花はマリーネの赤い髪に合うかな」

それであった。それについて考えだした。朴訥な顔に思案の色を浮かばせながら。

考えだすと止まりはしない。どうなのかと頭の中であれこれ思い浮かべる。そして遂に決めたのであった。

「これにしようかな」

決めた。しかしただ花だけを贈ったのでは駄目だと思った。ヤグルマギクはそれ程大きな花ではない。一つでは弱かった。それで彼は花を集めることにした。そうしてより青を大きくするつもりであったのだ。

「よし」

それでいくことにした。青い花を集めて束ねていく。そうして一つの大きな花の集まりを作り上げたのであった。

マリーネの誕生日。皆彼女の家の前に集まっている。やはり質素な家であったがそれでもマリーネは気にはしていないようであった。集まっている皆は次々と彼女に贈り物をあげていた。

### 第三章

「はい、これ」

「私はこれ」

皆それぞれ贈り物をしている。木彫りの人形だったり刺繍だったり。誰もが貧しいから贅沢な贈り物はない。しかしそれでも心のもった贈り物ばかりであった。女の子達の贈り物が終わると次は男の子達の番であった。

「なあ」

あの羽帽子の若者が皆に声をかけてきた。

「何持って来た？僕はこれだけだよ」

彼は羽であった。やはりそれが好きなようである。

「御前それ好きだな」

「だって羽って持つてるだけで幸せになれるじゃないか」

彼は言う。確かにその白い羽は綺麗で持っているると鳥になりそうな気持ちになる感じであった。

「だからこれにしたんだよ」

「そうなのか」

「で、御前は？」

羽帽子の若者は鼻の高い若者に問う。

「何持って来たんだ？」

「俺はこれさ」

彼が持って来たのは小さなブローチであった。木で作られた小さなブローチであった。

「それが」

「ああ。実はこれしかなかったんだよ」

彼は苦笑いを浮かべてこう述べた。

「お袋がさ。子供の頃持っていたものらしくて」

「それが」

「ああ。別にいいよな」

「いいんじゃないの？」

羽帽子の若者はあっさりとした調子でそれに返した。

「悪くないと思うぜ」

「そうか。じゃあ」

「それでフリッツ」

話はフリッツに及んできた。彼もそれに顔を向ける。

「御前は何をプレゼントするんだ？」

「何なんだ？」

「うん、僕はね」

彼はそれに応えて後ろに持っていたのを出した。それは青い花を束ねた冠であった。

「青い花？」

「ああ、これヤグルマギクじゃないか」

羽帽子の若者がそれを見た。

「それを束ねて作ったのか」

「そうなんだ」

彼はおずおずとした様子で答えた。

「どうかな、これで」

「そうだなあ」

彼だけでなく他の皆もそれを見て考える顔をした。それから答えるのであった。

「何かどうなるかわからないな」

「そうだよな」

鼻の高い若者も言った。

「とりあえずプレゼントしてみたら？」

「それからだよな、やっぱり」

羽帽子の若者が彼の言葉に頷く。

「ちよっとこれはどうなるか」

「けれど」

「ここでそばかすの少女が言ってきた。

「これ、凄く綺麗よ」

「確かにね。それは」

その言葉には羽帽子の若者も鼻の高い若者も頷く。このことについて異論はなかった。その通りだと思っただのである。

「後はマリーネがどう言うかか」

「プレゼントしてみたらいいよ」

「うん、じゃあ」

フリッツはそれに頷く。そしてマリーネの前へと向かうのであった。

「フリッツ」

「うん」

やはりおずおずとした様子で彼女の前に出る。冠は後ろに持っている。あえて見せはしない。

「僕はね」

まだ戸惑いがある。その顔でマリーネに述べる。

「これなんだけれど」

そう言つとその青い冠を出した。そしてそれをマリーネの頭に被せたのである。

「あつ」

「どう、これ」

「これって」

マリーネはその冠を見上げた。見ればそれは彼女の赤い髪に見事にかかっていた。

「私への贈り物？」

「うん、他に考えられなかったから」

彼は答える。

「こんなのしかできなかつたんだ。御免ね」

「御免ねって」

マリーネはその言葉を聞いて述べる。その間ずっとそのヤグルマ

ギクの冠に手をやって上を見上げている。

「知ってた？私ね」

「どうしたの？」

「どうしたのじゃなくて。私大好きだったのよ」

まだ上を見ている。ヤグルマギクを。

「ヤグルマギク。それをくれるなんて」

「よかったの？」

「ええ」

あらためて答える。その顔はにこりと笑っていた。

「有り難う。このことずっと忘れないわ」

「そんなに」

「ええ。だからね」

マリーネはここで言う。

「私、知っていたのよ。貴方のこと」

「えっ!？」

フリッツはその言葉に思わず目を見開いた。それと共にギクリとした。

「何を!？」

つい聞いてしまった。これがバランスを崩してしまったことだということとは彼は気付いてはいなかった。

「何をもって」

マリーネはそんな彼に微笑み返す。そのうえで言う。

「わかってるでしょ？」

「あっ、うん」

答える。答えた時でもう勝負は決まってしまった。

「一緒になりましたよ」

マリーネは言った。

「二人で」

「いいの？」

「ええ。これが貴方の気持ちだっただけだったから」

それで充分であった。マリーネは今心に冠をもらったのだから。それが何よりの誠意だとわかっていたから。

「だから」

「じゃあ」

マリーネはフリッツの両手を受け取った。そして握る。青い冠は二人のこころを重ね合わせた。それはまるで魔法のようであった。

青い冠 完

2007・2・1

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5957c/>

---

青い冠

2009年3月24日11時00分発行